

ぼくのちようせん

小 五

ぼくには発達しよう害があります。

発達しよう害は、生まれつきの脳機能^{のう}のしよう害で、細かい作業が苦手だったり、人の気持ちを考えるのが苦手だったり、ミスや忘れ物が多くなったり、人とコミュニケーションをとるのがむずかしくなったりすることがあります。

大人になっても治ることはありません。でも、訓練でしようじようをかいていけるので、ぼくは三才から七才まで東京にあるりよういく病院に通っていただきました。通い始めたころは、おしゃべりも上手ではなく、おはしも持てなくて、お母さんも少しこまっていました。

りよういく病院では、最初に言語訓練をしました。

例えば、りんごやハンバーガーなどの食べ物のカードを見て、それが答えになるなどなぞをしたり、ライオンやパンダなどの動物のカードを見て、当てっこをしたりしました。

なぞなぞや当てっこは楽しかったけれど、言葉を正しく発音するのがむずかしくて、「テレビ」を「レレピ」と発音したり、「ふうせん」を「ふうせん」と発音したりしていました。そこで、りよういくの先生と、鏡を見て舌の上に動かしたり、ぐるぐる回したりする訓練をしました。

おはしの練習では、お豆のおもちやつまんで、皿から皿へ移す練習を何度もしました。家でも、きよう正用のはしを

使って、お母さんとおはじきをお皿に移す競争をしました。

そして、それらの成果が出てきて、おしゃべりもできるようになり、おはしも使えるようになりました。

小学校に入学し、友達もたくさんできました。楽しい毎日ですが、こまったこともありました。それは、自分のつくえの引き出しがぐちゃぐちゃできたなく、整理整とんができないことです。どうやって整理整とんをするのか分からなくてこまっていたら、クラスの女の子が、「手伝ってあげるよ。」

と、いって整理整とんをしてくれました。また、名札をつけられずにこまっていたときも、クラスの友達が手伝ってくれました。

小学校で特に印象に残っているのは、

持久走大会のことです。ぼくは発達しよう害のえいきょうで、体幹が弱く、走る事が苦手です。そのときは四十八人中の四十六位で、走ることがとてもつらく、足がいたくて、泣きそうになりました。ゴールが近づくくとクラスのみんなや大人の人たちが口々に、

「がんばって。」

と言っておうえんしてくれました。ゴールしたら思わず泣いてしまいました。お母さんも泣いていました。

はだが黒い人も白い人もいます。黄色の人もいます。せが高い人もいれば低い人もいます。いろいろな人がいるように、発達しよう害は一つの個性で、みんなちがつてみんないいと思います。

ぼくのしよう害は治らないけれど、少しずつでも練習すれば、やりたいことも

できるようになるし、助けてくれる友達もいます。

これからいろいろなことに、ちようせんしたいです。